
Fate/stay night - ちょっと異世界までお使いしてきた英雄くん -

駄猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/stay night - ちよつと異世界までお使いしてきた英雄くん -

【Nコード】

N5567X

【作者名】

駄猫

【あらすじ】

始まりは一つの世界跳躍。関西弁な英雄なお馬鹿な主人公が織りなすもう一つの√。Fate/stay nightとファンタジースター2∞のコラボ(?)やりたい放題やっちゃいますのでお気をつけください。

第一話 運命は今宵始まる・・・格好いいけど厨二やん b y 悠人（前書き）

初めての方は初めまして。

哀川君系列見てくれた方はどうもです。

駄猫はまた変な作品をつくりましたw

第一話 運命は今宵始まる・・・格好いいけど厨二やん by 悠人

《side:Yuto Kanzaki》

あ、ども〜神崎悠人申します〜

タイトルに書いてあるとおりちょっとお使いしてきました

SEEDつつのをぶった切ったり、とある少女を二人程助けたり、
世界を救ったりしてきました

いや〜楽しかったですわ〜

所属は”リトルウイング”って言うところで、世界救ったら粒子に
なって目が覚めたら元の世界で

ビックリやる？それ以上にビックリしたのが、魔法つかえんねん・

・どやっ？

あゝ・・・でもエミリアとかナギサとか心配やわ〜・・・大丈夫な
んやるか？

因みに装備は”コクイントウ・ハウズキ”と”ロンギヌスの槍”つ
つつのを使ってたん・・・強いねんで？

聖書に出てたアレとは多分違うけどな〜

あ、言つとくで？俺、転生者とかいう変な種族ちゃうからな？

きちんと『冬木』生まれの『冬木』育ちやからな？

さて、これから学校なんやけど・・・

「お〜い！悠人〜！」

はい、幼なじみのシローくんです

フルネームは”衛宮士郎”夢は”正義の味方”・・・格好いいよね〜

「悠人先輩大丈夫ですか？」

こちらの美少女は”間桐桜”こと桜ちゃんです
え？何が違うのかって？桜じゃなく桜なんだけど・・・分かんない
よね？（笑）

イントネーションギャップだね

「大丈夫やで！後、暇やで！」

心配かけたので元気よくサムズアップ！

「暇でどうすんだよ・・・これから学校だぞ？」

お二人とも苦笑・・・あれ？なんか間違ったこと言った？

「取り敢えず学校に行きましょうか」

取り敢えずって・・・俺泣くよ？

さて今日も快晴だしガンバルかな・・・

- 学校つくまで・・・戦略的カット！ -

「・・・」

今、目の前歩いてるのが皆のアイドル兼俺の幼なじみPart2の
”遠坂凜”

俺は凜ちゃんって呼んでるで〜・・・なんか怒られんねんけどな・

・

確か家訓が『どんな時でも余裕を持って優雅たれ』やったかな？め
っちゃ美少女やで・・・どやつ？

「オハヨー凜ちゃん」

・キツ・

「おはよう、神崎くん」

・・・ね？怖いやろ？美少女やからこそ怖いねんよ・・・

全く・・・美少女は笑ってると可愛いねんけど睨まれると本気で怖
いわ〜・・・

・放課後迄・・・知略的カット！・

「おう！衛宮と神崎いどうせ暇だろ？道場掃除しといてくれよ」

「おう、良いぞ」

「・・・なんでそんな簡単に即決すつかねえ？シローくんもやるよ
うやし俺もやるよ」

「ククク・・・ありがとうな衛宮と神崎」

「テメエの為じゃねえぞ？ワカメくん」

「ッブ・・・ワカメ・・・」

お・・・受けてる・・・取り巻き少女A爆笑やん

おお・・・芋づる式に笑いが広まってる・・・k t k r 違う違うキ
タコレ！

笑いはええで（笑）ワカメもプルプルしてるし（笑）

「悠人・・・ブッ・・・そういうのは・・・ブフッ・・・駄目だっ
て」

「いやゝ見た感じそのまま言っただけやから・・・大丈夫やろ？ワ
カメちゃん？」

「ワカメワカメ五月蠅い！！！！お前らも笑ってないで行くぞ！！！！
」

「あ・・・待ってください先輩！」

- 掃除終了まで・・・メイド的カット！ -

「そう言えば、悠人・・・さっきからギンギン変な音が鳴ってないか？」

「んゝ金属音やな・・・見に行ってみる？」

「・・・面白そうかもな・・・」

「せやせや・・・なら行くぜい？シロヤン」

「誰だよシロヤンって・・・」

「Youだよゝ！」

「・・・何故英語にしたんだ？」

「何となくに決まってるじゃないかゝ」

俺の座右の銘は『行き当たりばったり』だからねえ
後は『困ってるの見かけたら助ける・・・それが偽善でも』ぐらい
かなあ・・・

「・・・え？」

「・・・うわゝお・・・」

えゝ・・・なんか全身青タイツの変態さんとガチムチな赤の人がいるんですが・・・

レベル的には青が152位で赤が151位かな・・・

因みに俺はレベルで言うと転生80時に二回からの80位だな

・・・今なんか意味分らないこと考えてたような・・・
まあ、ええか・・・

おっとお、青のタイツがなんかコツちに・・・キタアアアアア！

「シローくん！逃げるぞ！」

「お、おう！」

- 家まで・・・アイス食べながらカット！ -

「流石にココまで来れば・・・」

「シローちゃん・・・それフラグや・・・」

- ドガッシャン -

「おい、坊主共・・・よくまあ、面倒なところまでにげてくれたなあ」

「だって青タイツさん殺す気まんまんだろ？」

「え・・・マジか？」

「シローくん・・・この人の殺気パネエから・・・

逆になんで受け流せてるの？っておもってるんだけど・・・て悠人は悠人は言ってみる」

「もういいか？坊主達よオ・・・」

「しょうがない・・・か・・・シローくん実は俺さ・・・英雄なんだよ」

「へ？」

「巫山戯たことぬかしてんじゃねえぞ？坊主」

「はあ・・・うつせえから黙れ三下・・・来い・・・」コクイントウ・ハウズキ”！」

「真剣!？」

「・・・ほお・・・」

「んじゃ・・・歯ア食いしばれ三下・・・俺の真剣はちつとばっか響くぞオ！」

「やってみやがれ！」

《side:Rin Tosaka》

「え！？何で悠人が！？」

「フム・・・あの男、危険だな・・・」

「なんでそんなことが言えるのかしら？」

「先ず、ランサーの早さについて行けているといふことだろうな」

「そう・・・だけど・・・」

「あの男との関係はあるのか？」

「・・・ええ、幼なじみよ」

第一話 運命は今宵始まる・・・格好いいけど厨二やん b y 悠人（後書き）

楽しんで読んでもらえたなら光栄ですw

リハビリがてら新作ですw

哀川君更新のが優先なんで、週一更新になるかな？
では！

第二話 問おうアナタがマスターか？いいえ、コイツは悪ふざけの塊です

《side:Yuto Kanzaki》

はあい・・・神崎悠人やで！

取り敢えず、前回に気付いたことはコレが聖杯戦争やってことやな・

・
何で知ってるのかって？

だって、第四次聖杯戦争みたで？俺・・・

無精ひげのおじさんと神父っぽいキチガイ変態ときんぴか鎧見たもん
取り敢えず相手を受け流して受け流して受け流して・・・

ンで、隙作ってわざとソコに突かせてカウンターってのをずっと半
永久的にやってるで・・・

ええ加減相手もイライラしてきてるようやし、決めるかな

「なあ、青タイツ・・・そろそろラストにせえへんか？お前もイラ
イラしてきた頃やろ・・・」

「わかってんならそんな戦い方すんじゃない！」

「いや、一応戦闘に関しての天才には俺ってば戦闘の才能がないか
らこういつ戦い方になんねよ」

「・・・嘘つくな！テメエが才能ねえつつうなら俺は非才になるつ
つうの！」

「・・・え？」

「え？っじゃねえよ！」

「・・・いや、だってさ、向こうのヤツ達にや俺より強いのか
ったぞ？」

サポートのメイドロボとかエミリアとかナギサとか
あとはシズルとか・・・結構強いのだぞ？

因みに、一緒に依頼行くととき主人公±0のレベルになっておりま
す。

よって、主人公の思いこみです。強さは

悠人<<<クラウチ<ウルスラ<シズル<ユート<エミリア〃
ナギサ〃ルミアな感じです。

・・・今、なんか変なテロップみたいな流れたよ、な気がしたん
やけど

ま、ええか！

「・・・お前より強いって・・・どんだけだよ・・・」

「いや、俺弱いんやって基本！こういう戦い方してるから生き残れ
てんねん！」

「まあ、いい・・・よくねえけど、まあいい・・・
なら決着つけるとすつか・・・俺もそろそろ疲れてきてるしな」

「・・・俺空気だよ・・・？」

「・・・ゴメンシローくん！忘れてた！」

「畜生！！」

「・・・漫才してるトコわりいんだが・・・もういいか？」

「・・・もうちょいだけまってやシローくん・・・ええで・・・やるか」

「・・・悠人・・・やっちまえ！」

「おうよ！シローくん！」

「幻獣召喚・・・」「突き穿つーゲイ・・・」

《side: S i r o E m i y a》

お、俺の出番か・・・

こんな空気で言うのもなんだが、やっとか・・・

・・・原作主人公なのについていうのはメタだな・・・

今、悠人が戦ってるのを見てびびってる・・・

コイツがさっき言ってた「実は俺さ・・・英雄なんだよ」って言

葉・・・

戦いが始まるまでは嘘だと思ってた・・・でもこの戦いを見てからは・・・

嘘じゃないってコトが分かった・・・正直怖い

・・・でも、親友が戦ってる、逃げられるわけ無いじゃないか・・・
今出来るのは情けないけど応援だけ・・・ならやれることをやって

やる！

「・・・悠人・・・やっちまえ！」

「おうよ！シローくん！」

悠人は腕を前に伸ばし、青タイツは夜空へ跳んだ

「幻獣召喚・・・」「突き穿つーゲイ・・・」

悠人の後ろに赤の・・・魔神！？

《side:Yuto Kanzaki》

「ミラージュブラスト！！」「死翔の槍-ボルグ-！」

「オラァ！行きやがれ！んでそのまま逝きやがれ青タイツ！」

「！？この俺が押されているだ！？」

「こちとら馬鹿でかいモン相手にしてたんだ！そんな槍効かねえ！」

-ズドン！-

「うがぁ！？」

「シュー……」

「……終わったか……生きてるみてえやけど……」

「……なんで生かしてんだ？」

「いや、楽しかったしな……また戦いたいと思って……
その代わりにシローくんによ手だすなよ？俺に負けてんからこれ
ぐらい聞いて貰うで」

「……つぶ……フハハハハ……おい！坊主！テメエの名
前教えろ！」

「俺か？俺は……悠人……かn」

「ズドン！」

「……！？なんや！？」

「……避けられたか」

「何してるのよ！アーチャー！！」

「わりいがココは引かせて貰う！悠人スマねえな……」

「早く逃げろよ！青タイツ……てな訳で凜ちゃんどういっつもり
や？」

「知らないわよ！彼処のアーチャーに聞きなさ……え？なんで彼

処に」

・・・あれ？ヤバイよな・・・空氣的に・・・
ちょー！？白いの振りがぶって何しよう！？？

「シローくん！！危ない！！」

ードン！！ー

・・・あ、力の限り突き飛ばしてもうた・・・

ーキラーン・・・ー

・・・あれ？何か光って・・・

「（ぽけ～・・・）・・・」

「問おう・・・」

ああ・・・聖杯戦争ってやつにシローくんも呼ばれて・・・
ってそういや、シローくんの手に厨二刻印ってあったけか？
なかったよゝなきがするんやけど・・・

金髪美少女がコツチを向いて

「アナタが私のマスターか？」

・・・え？俺ですかい・・・？空氣的にシローくんじゃね？

「いえ、アナタです」

地の文にツツコムなし・・・

「ふむ、気をつけます」

「・・・まあ、良いねんけどね？俺がマスターで合ってるん？アツチじゃないん？」

「ええ、アナタです」

「・・・はあ、俺もついに巻き込まれ症候群になったかあ・・・」

「・・・」

感慨深いわ・・・なんちゅうか・・・

取り敢えず俺に今できることはSEEDみたいな汚れた聖杯を破壊することな筈や・・・

あの無精ひげおじさんが光を使って壊したように・・・

「ハイ、俺がマスターや！よろしく頼む！」

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある、ココに契約は完了した」

「・・・よろしくな・・・」

「・・・（ポカーン）」

「・・・な！ん！で！アンタがセイバーを召喚するのよ！！！」

「・・・セイバーやっけか？俺のコトは悠人でいいで！」

「無視しないでよ！」

「ユウトですか・・・ああ、この響きは実にアナタに似合っている」

「・・・私のセリフが・・・まるまま・・・」

「うわ・・・まさかのかぶりのセリフとはね・・・」

「しかも私たちの方は基本表に出てこないから、完全に原作知らない人からしたら」

「私達の方が・・・」

「・・・メタいぞ？遠坂・・・」

「五月蠅いわよ！衛宮くん！」

「・・・なんでさ？なんで怒鳴られたんだ？」

「セイバー・・・俺の魔力でセイバーからしたらどれくらい？」

「そうですね・・・ソコのマスターの数十倍ですかね」

「・・・本当になんでアンタばかり！！」

「・・・いや、もしそうやねんやとしたら・・・」

「違う場所にて・・・」

「はあ、あの人は何処に・・・」

「本当よね・・・勝手にどこかへいつちゃってさ・・・」

「そうですね・・・」

「・・・今日もアイツ達空見に行ってるのか・・・」

「そうだね・・・あの娘達の救世主であり、支えであり・・・」

「・・・来るときも消えるときも台風のようだったな」

「そうね・・・」

「悠人ー！早く帰ってきてくれー！一緒にプリン食べるって約束し

た
だ
ろ
ー
！
」

第二話 問おうアナタがマスターか？いいえ、コイツは悪ふざけの塊です b y

はい、書きました！

誤字脱字の報告をお願いします！

では！

第三話 魔力あっても使えなきゃ唯の魔力タンクやし・・・by 悠人

《side: Yuto Kanzaki》

・・・ん？ああ・・・

自分が唯の魔力タンクってしつた神崎悠人やで・・・

俺もう駄目やわ・・・才能ねえもん・・・魔法使いたいのに、才能ねえもん・・・

某薬味先生みたく魔法使いたい・・・はあ・・・

「アンタにも苦手なことがあつて良かったわ・・・」

「・・・魔法使いたい・・・」

「元気出してくださいユウト」

「元気なんかでえへんわ、魔力タンクやん俺・・・キャスターとか居たら一番に狙われるやろ・・・」

「大丈夫だと思いますよ、ユウトなら狙われたとしても瞬殺だと思います」

「今、その励まし方ってどうなんだ？セイバー・・・」

もう、アレやな・・・魔法使えるようになった銀さんがかめはめ波撃つてみたいと思うのみて

ねえわぁ・・・とか思ってた俺が鬱陶しいてたまらん・・・実際こうなったら・・・

撃つてみたい撃つてみたい撃つてみたい！！

「しょうがないわね・・・私が教えてあげようかしら？」

「・・・マジ？是非！お願いします！」

「！？ちょ！？分かったから！！土下座は止めて！！」

もう、プライドなんか知らん！

俺は千の雷とか闇の吹雪とか撃つてみたいんや！！

「リン・・・敵のマスターに魔術を教えてもいいのか？」

「んっ・・・其れもそうよね・・・って・・・

嘘よ！？お願いだからそんな泣きそうな目で見ないで！！」

「ユウトがチワワみたいで、可愛いです・・・」

「キャラ崩れてるぞ！？セイバー」

「五月蠅いですエミヤ」

「なんでさ！？俺つつこんただけだぞ！？」

- 深夜食堂がやるぐらいの時間まで・・・カット！！ -

「と、いうわけで俺は何をしたらいいんや？」

「取り敢えずは、強化とかかしら？」

「ふむ・・・なあなあ凜ちゃん」

「なにかしら？」

「とある魔術の禁書目録に出てる魔術やってみていい？」

「・・・別に良いわよ？（出来るはずないだろうし）」

「・・・多分出来るはずないとか思われてるんやろうな・・・

まあ、できひんやろうけど・・・出来たら最強やろ・・・黄金鍊金
とか魔女狩りの王とか・・・

うむ・・・やってみよう・・・

まずは・・・

「出てこい！金！」

アルス・マグナて想像すればよかった筈・・・！

「・・・ムリよ其れは・・・等価交換のとの字も無いじゃない」

「ですよー・・・てことはもうムリじゃね？とあるの魔術って・・・

」

「アレのルーンとかわからないしね」

「なら・・・圧縮圧縮魔力みたいなのを圧縮」

かめはめ波を想像して・・・パーソナルリアリティをなんたらか
たらで・・・

「かゝめゝはゝめゝ波ああああ!!」

- ポス -

「ぶく・・・」

「・・・」

もおやだやわあ・・・

ぽすってなんだよ・・・ぽすって・・・

はあ・・・もおやだ・・・

「く・・・くく・・・ゴメンって・・・ゴホン！取り敢えず、私
の言うことを聞きなさい・・・」

「うん・・・そうするよ」

「まず、このランプをかけれるようにしなさい」

- 夜二時まで・・・カット!! -

「なんというか・・・俺才能なさすぎだね」

「・・・ええ、流石にコレはなんとも言えないわ・・・
才能云々より魔力が多すぎて魔力に振り回されている感じね・・・

」

「だな・・・もう、俺剣ふりまわしとくコトにするわ・・・」

「・・・そうね・・・ゴメンね、力になれなくてゴメンね・・・」

「いや、大丈夫・・・上条さんも自分にある力でなんとかしてたし・・・
俺には剣や槍があるし心配せんでもええよ!」

「ていうか・・・もう眠い」

「あ、朝弱いのにゴメンな・・・」

「付き合っつて言ったのは私だしね」

「・・・ココで寝るんやったら俺のベッド使って・・・俺は適当に
座布団頭にひいて寝るから・・・」

「・・・一緒に寝なさい・・・風邪ひかれても困るし・・・」

「いや、そこは男女の関係云々ありますやん？」

「へえ、教えてあげた私の言うことが聞けないんだあ」

・・・小悪魔やん・・・

眠いから頭がどうかなってんのかも知らんけど・・・

もう、めっさ可愛い・・・黒笑が可愛い・・・ツンデレ可愛い

「んゝなら俺寝相悪くても文句言っなよゝ」

「分かってるわよ」

「おやすみゝ凜ちゃん」

「ん、おやすみ」

結局、起きたのが8時で学校遅刻しました・・・
凜ちゃんに切られるわ、セイバーになんか怒られるわ・・・
不幸だ・・・

第三話 魔力あっても使えなきゃ唯の魔力タンクやし・・・by悠人（後書き）

例え強くても、魔術はつかえません！

まあ、攻略法としては某おろが口癖の抜刀齋の起用ですかね

魔術師は詠唱できませんし・・・

ギャルゲとかなら遠坂さんと眠ってるところがCGになるんだろう
なって・・・

誤字脱字の報告をお願いします！

では！

第四話 美味しいモノは好きですが、甘ったるいのは嫌いです（キリッboy）

《side:Yuto Kanzaki》

あゝ朝見てる方にはおはようございます

昼見てる方にはこんにちは、夜見てる人にはこんばんは

どうも神崎悠人です・・・朝から理不尽な不幸に巻き込まれたんで学校休もうと思ったんやけど

なんというか藤村タイガーがガオーてなって桜ちゃんにはフライパンでしようがないから学校に

凜ちゃんに話しかけるとジロリと睨まれ、暇だから校庭回ってたら

・・・

「・・・魔方阵？まあええや・・・魔力のこめ方は分かってるし飽和させてバーンしよか・・・

八つ当たりとかじゃないからな？全然ちがうからな？」

「・・・驚いた、アナタはこの基点がわかるのですね？」

「いや、適当に歩いてたらみつけたんやけど・・・」

「・・・まあ、見つけたご褒美です・・・アナタは優しく殺してあげましょう」

「・・・ああ、なるるゝ！お前さんサーヴァントか！」

「フフ・・・そういうアナタはマスターだったのですね

ならばこの基点に偶然と言えどたどり着くのも納得がいく」

「・・・何日か前の甘ったるい感じはコレかぁ・・・
あと、残念やったけど・・・お前は俺を殺されへんで・・・
俺を殺すんやったらサーヴァント全部引き連れて、かつ神様でも
殺せるレベルの強さでいいや!」

「・・・アナタは馬鹿ですか? まぁ、殺してあげましょう」

「ズン」

「気がへんって言うてるやん」

「ガギン」

「てな訳で今回のお供は”ロンギヌスの槍”でええか」

「!?!? 何故宝具を!?!」

「へ・・・コレ宝具なんか・・・なんか変な感じはしてたんや
けど宝具か」

「てな訳で、やり合うか?」

「・・・ココはひかせて貰います・・・その宝具は相性が悪い」

「ンンじゃあ、コレは壊させてもらうな」

「そんなこと出来るはず・・・」

さうと、気分はパッサージュリングを削るルークくんです

集中集中・・・超振動できるんちゃうか?とか考えずに集中集中・・・

- バキン -

「・・・規格外ですね・・・」

「ほめ言葉や」

さて・・・終わったし帰るか教室に

「よお、神崎」

「・・・どうした？ワカメ」

「（ギリッ）・・・い、いやゝお前もマスターなんだろ？僕とくま」

「くみません！遠慮します！つか消える俺の目の前から！」

「（ブチッ）ああ、そおかよ！来いライダー！！」

「すみません、シンジ・・・そのマスターとは戦えません」

「うるせえんだよ！」

- バキッ -

あ、女性殴った・・・ワカメが女性殴った

後、あの変な本気になる・・・エミリアいたら解析とか出来たのに・・・

でも、ワカメから魔力感じひんのに、なんでマスター？

・・・怪しい本、魔力無し・・・ここから導き出せる答えは・・・？

「あゝ・・・ワカメその本でその女の人従わせてんやなゝ
そついうプレイがお好みですか？もしそうなら、本気で近づくな
変態」

「うるさい！ライダーはやくやれ！！」

「・・・分かりました」

「・・・メンドイ・・・きてくれセイバー（棒）」

「・・・棒読みは無いでしょう」

「はや！？」

「いえ、こちら辺で鯛焼きかって食べてました」

「・・・」

「僕を無視するな！」

「「あ、いたんだ」」

「畜生！畜生！」

「取り敢えず、俺に本気を見せてくれへん？」

「はあ、いつも無茶ぶりしますね・・・了解しましたユウト」

- 楽勝だったのでカット -

「・・・どうしょか？この空気・・・」

「異常に早く終わりましたね・・・」

「あ、そついや、今日教会に行くらしいから・・・よろしく!」

「何をよろしくしろと?」

「何かをや!」

「・・・」

「ゴメンて・・・お願いやから冷たい目は止めて」

「・・・」

- そんなこんなで夜まで・・・カット!!! -

「よし！凜ちゃんよろしく！」

「・・・わかったわ」

・・・さて、教会までいくんやけど・・・
どうしようか？・・・暇やし・・・セイバーとしりとりでもすつか

「セイバー、セイバーしりとりしよおぜ！」

「・・・まあ、いいですが・・・」

「じゃあ、りからな〜リス」「スイカ」「カメ」「メバル」「瑠璃色」「ローストビーフ」

「・・・食べモンばっかやん・・・」

「文句言わないでください、しりとりにつき合ってるんですから」

「・・・もうええわ・・・腹減るし・・・」

「あ、そうですか」

「・・・」

腹減った・・・

帰ったら飯作ろう！麻婆カレー作ろう！

「着いたわよ・・・綺礼！いるんでしょ？7人目のマスターをつれてきたわ」

「おお、そうか・・・ようこそ少年、私は言峰綺礼という・・・君の名は？」

「神崎悠人や」

「そうか・・・それでは神崎悠人、君が最後のマスターという訳か・・・」

「そおやで」

「お前気楽だな・・・」

「シローくん！気楽がええねんで！」

「・・・頭痛い」

「・・・フム・・・それでは、ココに聖杯戦争の開幕を宣言する各自がおのれの信念に従い思う存分競い合え」

「おつよー！」

「さて、家帰るかあ」

「ちょ、ちょっと待ちなさい・・・同盟くまないかし」

「オッケー」

「・・・ユウト・・・まあいいのですが」

「・・・最後まで言ってないのに・・・」

「ま、まあ遠坂も悠人と敵にならなくて良かったじゃないか」

「うるさい!」

「なんでさ!？」

「ま、ええやん・・・はよ帰って麻婆カレー喰おうぜ!」

「えーもう帰っちゃうんだ」

「誰!？」

「初めまして、私はイリヤ・・・
イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言ったら分かるかしら？」

「アインツベルン!？」

「・・・先生分かりません!」

ズガアアアン！

「もういいし……俺普通ちゃうし……」

「某テイルズで隠しボスを木刀で倒したりする感じでいくし……別に拗ねてねえし……」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

! ?

「ふんわり」

「え！？バーサーカーが一回死んだ……」

「・・・規格外にも程があるでしょう」

「今回もアーチャーのマスターに同意します」

「俺も同意する・・・」

「……嘘……私のサーヴァント……ヘラクレスなのよ？」

「……お休みなさい！！！！！」

7
 ■
 ■
 ■
 ●
 ●
 ●
 ■
 ■
 ア
 8

「ふん……峰打ちやから死ぬことはねえ！」

「一回死んだわよ！／死にました！／死んだぞ！」

「・・・皆で突っ込んでもええやん・・・」

「バーサーカー！！ねえバーサーカー！！」

取り敢えず、あの少女に近づいていつて・・・

「ちょ！？悠人止めろ！！」

「・・・」

頭に向かって・・・

「悠人！！」

拳骨を落とした

「うっ・・・」

「簡単に人殺すとか言わん！俺ア悲しいで・・・
こんな美少女がさ・・・人に向かって殺すとか・・・ホンマ悲しいで・・・」

「うっ・・・早くころし「ません！！」」

「もう、良いからソコにつれて俺ン家来い！」

「え？」

「何を言っているんですか？ユウト」

「・・・また、あの馬鹿・・・」

「よかった・・・殺すとは思わなかったけど、ケガもさせなくて」

「また・・・とはどういうコトですか？」

「昔からあーなのよ・・・」

第四話 美味しいモノは好きですが、甘ったるいのは嫌いです(キリッboyせん

ええ、今日もコツチですw

もう次の話のネタもできかけてますww

さて・・・誤字脱字の報告はお願いします！
では！

第五話 ネットバレするとカレーパーティーby悠人

《side:Yuto Kanzaki》

あゝ朝見てる方にはおはようございます

昼見てる方にはこんにちは、夜見てる人にはこんばんは
どうも神崎悠人です・・・

朝から理不尽な不幸に巻き込まれたんで学校休もうと思ったんやけど
なんというか藤村タイガーがガオーてなって桜ちゃんにはフライパ
ンでしようがないから学校に

凜ちゃんに話しかけるとジロリと睨まれ、暇だから校庭回ってたら・
・

変な姉ちゃんに絡まれて、ワカメに絡まれて、セイバーに頼んで瞬
殺させて、

あつという間に教会ついて、白い少女に会って、ごっつい倒して今
に至ります

「さて、レッツカレーパーティー!!」

「「「「「なんでさ!?!?!」」」」」

「え?」

「え?じゃ無いわよ!」

「ユウト!バーサーカーのマスターを連れてパーティーとは何を考
えているのですか!?!」

「いやゝ・・・飯喰えば仲良くなるかなって?」

「疑問で言われても・・・」

「取り敢えず・・・イリヤだっけか？俺特性麻婆カレーをやるっ！」

「え？あ、うん・・・」

「さあ・・・端と食べてくれたまえ！」

「もきゅもきゅ・・・」

「どうだ？」

「・・・おいしい！」

「（ニヤニヤ）取り敢えず皆食べてみてや！」

「・・・うめえ・・・負けた・・・」

「ユウト！おかわりを！」

「早いわ！」

「つく・・・ココまで美味しいとは・・・」

「どやっ？」

「「「「美味しいです」「」「」

・完全に食べ終わるまで・・・カッ！

よし！うまいと言ってもらえた・・・
取り敢えず、まあ・・・イリヤちゃんに何で攻撃してきたんか聞
か・・・

「なあ、イリヤちゃん」

「なに？」

「何で攻撃してきたんや？」

「・・・言わなきゃ駄目？」

「ン」

「・・・そこのお兄ちゃんはキリツグの息子でしょ？」

「・・・何で爺さんのコト知ってるんだ？」

「私はキリツグの娘よ」

「「「「・・・え?」「」」」

「だ!か!ら!」「いや、ええ?あの爺さん盛つてたんか!?」／／
／」

「アンタ!女の子いるんだからそう言う言葉は慎みなさい／／／」

「あ、悪い・・・つい学校での癖で・・・」

「・・・ンン／／／!取り敢えず・・・先ず、其れで何故殺しにきたの?」

「私はキリツグに捨てられたの・・・だから・・・息子のお兄ちゃんを殺そうと思って・・・」

「なるほどなあ・・・でも、失敗したんやし・・・」

「そうやなあ・・・俺達と手を組まんかあ?どうせやったら仲間が多い方がええし・・・」

「なんかイリヤちゃんには変な感じがあるし・・・狙われたら後味悪いし」

「変な感じって・・・どういうコトだ?」

「ん?・・・いや、なんか身体が魔力のような・・・」

「・・・そうだよ、お兄ちゃん」

「悠人でええよ」

「ユウト?」

「応！・・・で？その正体とは？」

「聖杯の器だよ」

「「「「！？」」「」」」

「あゝなるほどな・・・だから変な感じしたんか・・・やったらやっぱまもらなアカンやる・・・」

聖杯だろうとなんやろうと女の子を見殺しにする意味が分からんな・・・

「私が聖杯だから「じゃなくて、俺見殺しにすんの嫌やし」・・・え？」

「だから、俺は女の子を見殺しにすんのは絶対やだ」

「・・・流石悠人ね・・・」

「本当に流石だな・・・やっぱり」

・・・俺がいつもこんなコトしてるから慣れたのか・・・反省も後悔もしないがな・・・と、言っても普段は猫とか犬とかやけどな・・・

「・・・私を守ってくれるの？」

「うむ、その「づい」と一緒に守ったるわ！」

「ユウト・・・何故其処で逆転裁判のポーズをするのですか？」

「なんとなくやで！」

「・・・」

「いや、ゴメンやから・・・そんな冷たい目で見んといて・・・」

「うん、其れムリです」

「・・・この漫才が恒例になってきてるわね・・・」

「本当だな・・・」

「アハハハハ・・・ユウトは面白いね・・・」

「・・・何故こうなっているのだ・・・頭が痛い・・・」

「・・・このカオスな感じがええなやつば・・・
さっきみたいに殺伐とした空気は苦手やし、面倒やし・・・」

「さて・・・コレで一件落着やな・・・」

- 違う場所にて・・・ -

「そっだ・・・世界を超えよう！」

第五話 ネットバレするとカレーパーティーby悠人（後書き）

さて・・・誤字脱字の報告をお願いします！
では！

・・・今回短いぜい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5567x/>

Fate/stay night - ちょっと異世界までお使いしてきた英雄くん -

2011年11月11日21時26分発行